

アザミ

Plumed thistle



学名：Cirsium Adans. (キルシウム)
科 目：Compositae (キク科アザミ/キルシウム属)
原産地：北半球の温帯

キク科の多年草または一年草のアザミは、北半球の温帯に約250種が分布し、多くの国の野山などでごくふつうに見られる植物で、日本にも50種あまりが自生しています。

そのうち園芸用に栽培され、店頭に出まわっているのはハナアザミで、この名は日本の本州から四国、九州にかけて広く分布するノアザミ(キルシウム・ヤポニクム)を改良した園芸種の俗称です。ドイツアザミという別名で呼ばれることもあります。作出国はドイツではなく、江戸時代に日本でつくられたもので、ノアザミが葉縁に鋭いトゲをもつのに対し、トゲが小さくなって扱いやすくなり、花色もより鮮やかなのが特徴です。

草丈は50~100cm。株元から直立して分枝する茎に互生する葉は細長く、縁が大きく鋸歯のように切れ込み、歯の先に小さなトゲをもっています。春から夏にかけて茎の先端に咲く頭花は、密集する無数の筒状花からなり、直径は5~8cm。花の基部には萼のような総苞があり、小さな総苞片6~7列が重なり合うように並んでいます。花色は主に赤紫で、ピンクや紅、白のほか、最近は黄色の品種も生まれています。長楕円形の果実は羽毛状の冠毛があり、長さは2~3mmです。

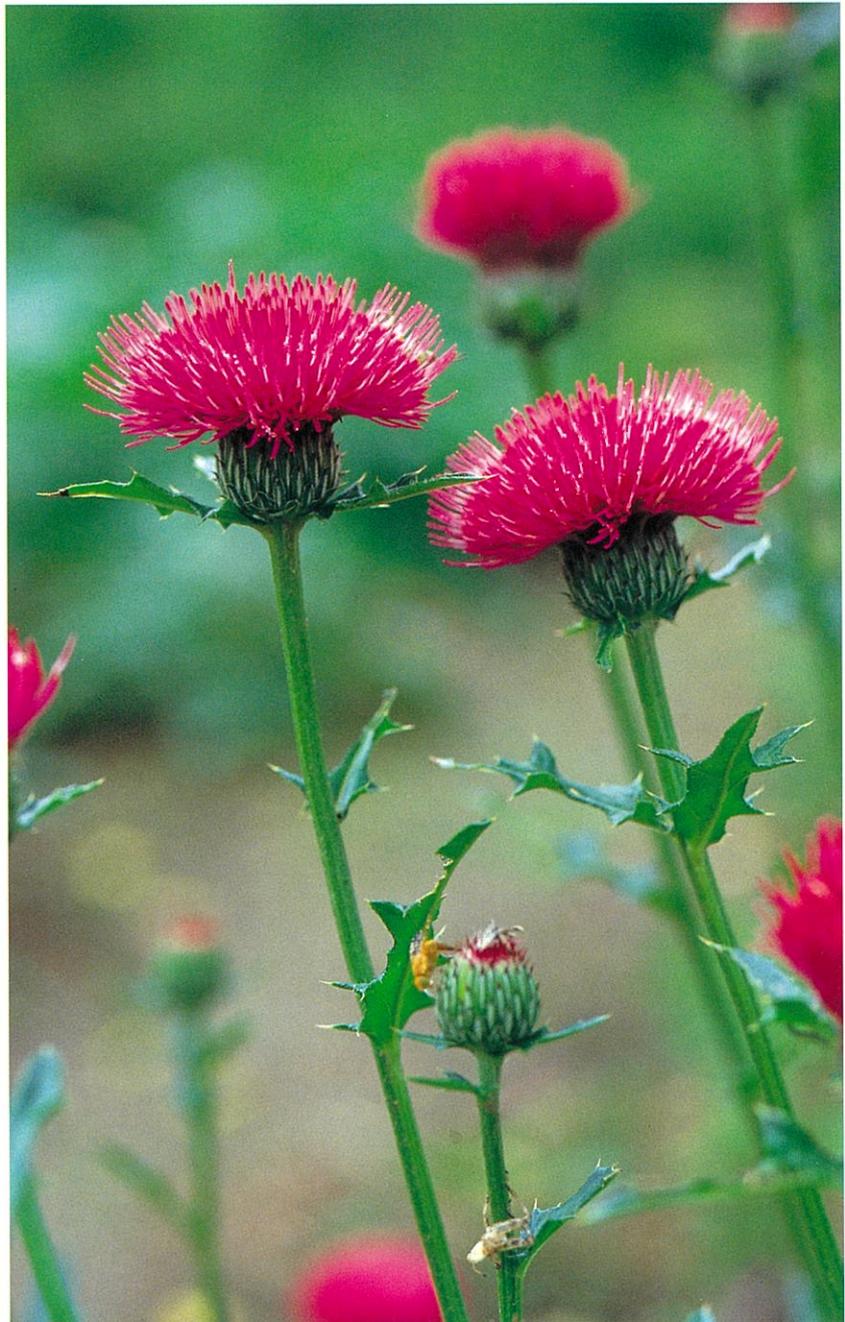
園芸品種では、昭和初期に改良された早生系統の‘寺岡アザミ’がよく知られています。つやのある濃い緑色の葉に紅色の花が鮮やかに映える美しい品種で、葉のトゲも比較的少なく、最近はこの改良種で早咲きのアーリーシリーズが広く栽培され、また、花径7~8cmと大輪の赤紫花を咲かせる‘楽音寺’なども人気です。これらの園芸品種は本来多年草ですが、一年草として扱われています。

生育旺盛で草丈が高くなるので、ボーダー花壇では後方に植えるとよいでしょう。また、水あげもよいため、切り花にも向いています。

栽培ポイント

栽培

耐暑性、耐寒性ともにあり、地植えでも鉢



かわいらしい花容で古来親しまれているハナアザミ

MEMO	栽培：難易度 ★☆☆☆☆	開花時期：7~8月(春まき) 5~6月(秋まき)
	生育温度：15~23℃	収穫時期：-
	手入れ：摘心、支柱立て	高さ：50~100cm
	土：7:3(赤玉土:腐葉土)	病気・害虫：ウドンコ病・ナメクジ、アブラムシ



ノアザミの園芸種ハナアザミ

植えでも栽培が可能です。繁殖力旺盛で乾燥にも比較的強く、日当たりと通風を確保すれば、あまり手をかけなくてもよく生育します。

寒冷地では春、暖地では秋または春に種子をまいて栽培するのが一般的で、春まきの適期は4~5月、秋まきの適期は9~10月。平箱に浅く溝をつけて条まきにするか、ビニールポットに種子が重ならないよう均等にばらまき、種子が隠れる程度に覆土します。種まき後はたっぷりと水やりし、土を乾かさないようにして半日陰で管理しましょう。約1週間後に発芽したらよく日光に当てて育苗し、本葉2枚の頃に赤玉土7、腐葉土3の混合土を入れた小鉢に移植し、本葉4~5枚になったら、地植えの場合は株間を30cm前後とり、鉢植えの場合は5~6号鉢に1株を目安に植えます。

生育温度

生育適温は15~23℃、発芽適温は15~20℃。春まきの際は十分気温が上がってから、秋まきの際は気温が下がり涼しくなってから、それぞれまきましょう。霜除けを施さなくても戸外で冬越しでき、夏越しもとくに問題ありません。

手入れ

新芽が伸び出した頃に摘心すると、わき芽



がたくさん出て花つきがよくなるとともに、草丈を低く抑えることもできます。また、大型種は草丈が高くなると倒れやすいので、支柱を立てて固定しましょう。



素朴な花容で親しまれていますが、葉の縁にはトゲをもっています。

アザミという名の植物

ノアザミ（キルシウム・ヤポニクム）は本州から四国、九州にかけて広く自生し、日当たりのよい野山などでよく見られる野草の1つです。花屋の店頭に並ぶハナアザミは、この野生種から改良されたものですが、ノアザミの変種をハナアザミとして園芸用に栽培したのは、世界中で日本がもっとも早く、すでに江戸時代ごろから行われていました。当時の文献をひもとけば、『増補地錦抄』（1710年）に「紅筆、ふじの雪、あけぼの、うすすみ、くろべに」の5品種が紹介され、また『本草図譜』（1828年）には、「かば色、つま色、つま紅、白るり、つまむらさき」という品種が色つきで載せられています。

国内に自生するアザミ属には、ノアザミのほかにもさまざまな種類があり、それらは葉縁にもつ針状の鋭いトゲと、種子につく羽毛状の冠毛などに特徴があります。その代表格のフジアザミは、富士山周辺に多く見られ、8～10月に直径7～9cmの大型の頭花が垂れ下がって咲き、縁にトゲのある総苞片がそり返るのが印象的です。同じように大型種で頭花が垂れて咲くオニアザミや、太平洋沿岸に生えるハマアザミ、一風変わったところでは、細長く先のとがった総苞片が鋸にたとえられ、根が食用になるモリアザミ（別

名ゴボウアザミ）などがあります。

また、アザミ属以外にもアザミという名前をもつグループがいくつか知られています。切り花に利用されるエゾノキツネアザミは、葉にトゲがなく、茎の上部で分枝して小さめの頭花をスプレー状につけるアレチアザミ属の植物です。また、茎に膜状の翼をもつものは、その姿からヒレアザミと呼ばれますが、これはヒレアザミ属に分類されます。その他、トウヒレン属にはホクチアザミやキクアザミなどがあり、キツネアザミ1種からなるキツネアザミ属も、アザミ属に近縁の植物です。

以上のものは、いずれも花色が赤紫で、頭花が舌状花を欠いて筒状花のみからなるなどの共通した特徴をもっています。

なお、アザミという名前をもつ特定の植物はなく、その呼称はアザミ属を含む一連の植物を指す「総称名」ということができます。



山野を彩るノアザミ

ハナアザミの園芸品種 '寺岡アザミ'

日照

半日陰でも生育しますが、基本的に日向を好みます。地植えの場合は、できるだけ日当たりのよい場所に植えつけ、鉢植えの場合は

よく日光に当てて育てましょう。

水やり

春まきでは4～10月、秋まきでは3～11月は、土の表面が乾いたらたっぷりと水を与えます。それ以外の時期は水量を減らし、乾かしぎみに保ちましょう。

土

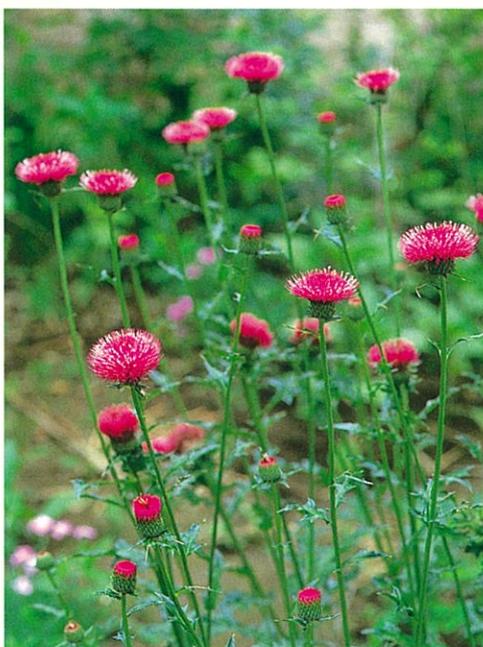
水はけがよく、腐植質に富んだ土を好みます。地植えの場合は、庭土に腐葉土を3割ほどすき込み、鉢植えの場合は、赤玉土7、腐葉土3の割合で混合したものがよいでしょう。

肥料

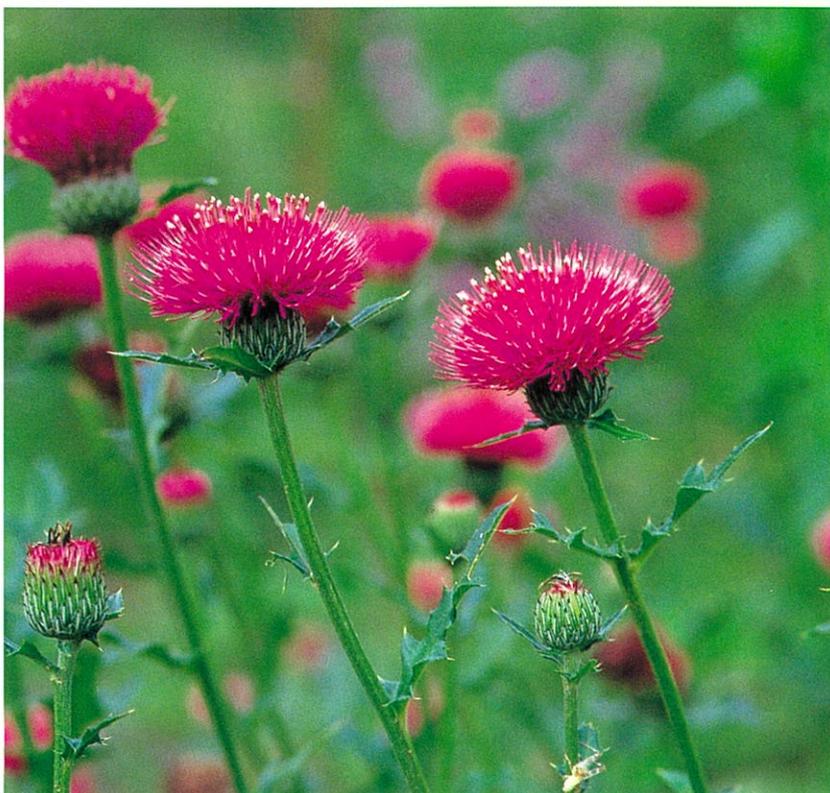
元肥として、地植えの場合は、有機質配合肥料を1㎡につき100gほど混ぜ込み、鉢植えの場合は、6号鉢で10gを目安に、緩効性化成肥料を施します。追肥は、春まきでは6～10月に2回、秋まきでは11月と4～7月に各1回、化成肥料を与えます。ただし、窒素成分が多いと葉や茎ばかりが茂って花つきが悪くなるので、リン酸、カリウム分の多いものを与えましょう。

植えかえ

植えかえの必要はとくにありませんが、何年も放置しておくと株が老化します。実生で新しい株を栽培しましょう。



若芽や茎は山菜として食用にされます。



ノアザミは、色鮮やかな園芸種に比べると控えめな印象なものの、野趣を楽しめる強健な性質です。

殖やし方

実生で殖やします。種子を採取するときは、花後も花がらを摘まずに放置し、秋に種子が熟したら採取して日陰でよく乾燥させ、冷暗所で保存しましょう。種子は発芽力が強く、自然にこぼれ落ちたものからも、よく発芽します。

購入アドバイス

種子は園芸店などで1年中入手できます。古いものは発芽力が落ちるため、できるだけ新しいものを選びましょう。

作業	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
日照		日向											
水やり		少なめ				(春まき)	ふつう						少なめ
		少なめ				(秋まき)	ふつう						少なめ
肥料				春まき									
				秋まき									
植えかえ							不要						

病気対策と害虫防止

- ウドンコ病は、葉の表面に粉をまぶしたように白いカビが生える病気で、春と秋に多発します。発生初期にベンレート、ダイセンなどの殺菌剤を散布して防除しますが、日照不足や通風不良も原因になりやすいので正しい管理が必要です。
- 苗をナメクジに食害されることがあります。夜間に見まわって捕殺するか、誘引殺虫剤などで駆除しましょう。
- 春から秋にかけて発生するアブラムシは、見つけ次第捕殺し、早期にスミチオンなどを散布して繁殖を防ぎましょう。